

コロナの時代の 脳研究所

新潟大学脳研究所長 小野寺 理



令和2年2月より脳研究所長を拝命しています、脳神経内科の小野寺です。拝命後まもなく、新型コロナの問題で、様々な対応に苦心しています。今後数年は、コロナとの共存が避けられないと思っています。また、新しい生活様式から以前の生活に戻ることはもうないように思います。この経験の中で我々が認識したことは沢山あります。その一つは、高等教育の概念の問題です。コロナの時代を経験した後は、高等教育には、受ける側の認識に大きな地殻変動が起こると思っています。今まで大学は、教育の物理的な場を提供し、その場への入場者を選別してきました。しかし、コロナによって雪崩式に導入されたオンライン授業は、事実上、物理的な場の制限を自らなくしてしまいました。これは空間という物理的な要素で守られてきた高等教育が、無防備に世界にさらされることに他なりません。学生が、世界の誰の授業でも選べるような地殻変動が起きています。自動翻訳も可能な時代では、言語すら飛び越えていくでしょう。学ぶ側にとっては革新的な変革です。一方、提供する側は、物理的な場の優位性を失ったとき、何をよりどころとして、その形を維持できるのでしょうか。

この時代こそ、我々の学問の本質が問われます。その中で、共に存在する空間を使う学問の重要性は、よりいっそう増すと考えます。また、新しい生活様式の中、この空間を共にする学問には、より大きな選別がかかるようになるかもしれません。

近年の脳科学も大規模解析が主流となり、研究のその場性が失われつつあります。また、ネットワーク型研究所という、いわゆるバーチャルな形の提案もある中、この、物理的な制約のある研究所という形態も変革を要求されているのかもしれません。しかし、本当の発見や楽しみは、やはりその、その場性の中から育まれるという古い考えも、私の中では歴然として存在します。研究所の最大の利点は、混沌とした“場”、学問の空間の提供にあると思っています。コロナ後の時代、研究所のあり方や学問の仕方は大きく変革する可能性があります。その中で、我々も選抜されていくと思います。しかし、どの様な時代でも、人が距離を縮めて学問を語る重要性、その本質はなくならないと思います。コロナ後の時代の新しい学問体系の中で、脳を研究する組織として、その空間の整備に尽力したいと考えています。

Message from the Director